

ている。そこで、騒音の測定を通して騒音の実態を把握し、生活環境に及ぼす影響を考え、並行して騒音対策の実情を観察する。

2 教材の概要

(1) 3～4人一組になり道路沿線、商店街、住宅地などの場所を選定し、それぞれの場所で騒音を測定し比較する。

(2) 測定に関しては、騒音計を地上から1.2mの位置で音源方向にマイクロホンを向ける。(風の強い場合は風防をつける。)

(3) 5秒毎に25～50回測定し、記録用紙に書き込む。(測定値は小数点を四捨五入し、整数値をとる)道路騒音の場合は変動幅が大きいため50回測定値の累積度数を求め、その中央値をもって騒音レベルとする。

(4) 通過台数や道路から住宅までのおよその距離を調べる。

(5) 測定結果や騒音対策の実情観察から、騒音が生活に及ぼす影響を考察する。



<国道沿いにおける騒音測定>

3 成果

パソコンを使用したことにより、データ処理が短時間ででき、考察に十分時間をかけることができた。

その結果、国道のように交通量の激しい地点では、騒音基準値をはるかに上回っていることが分かった。

また、国道沿線の民家やパチンコ店などでは、高いへいや二重窓などが見られ、騒音対策への実情も視察できた。

講座研修後のアンケートによると、研修教材の技能習得状況について「騒音の測定法」は70%と高い

数値を示していることから、技能を習得することができたと思われる。

4 反省点

騒音については取り組んでいる学校が少ないので小・中・高等学校の関連を考慮し、位置付けと系統性を明確にしていく必要がある。

生活環境調査（マップ作り）

1 教科のねらい

町を探検しながら、町の自然や建物、公共機関、商店などを観察し、地域で働いたり生活している人々の様子や自然の様子など、自分たちの生活地域の環境を調べ、関心を持つ。

2 教材の概要

(1) 3人1班となり、動植物、自動販売機、店の種類等の調査内容を決め、教育センター付近の探検を行なう。

(2) 探検途中で調べたことやその他気付いたことをメモ用紙に記入し、マップに場所をチェックする。

(3) センターに戻ったら、メモを模造紙上のマップに糊付し、まとめる。



<地域の自然の調査>

3 成果

小学校段階での環境教育は、身近な環境に触れ、親しむことが大切である。その意味において、マップ作りの手法は、1、2年生に限らず中・高学年においても有効である。研修者の多くは、講座を受講してマップ作りの技能を習得できたと感じており、小学校段階では、特に有効であることが分かった。